

第2章 つくば市の現況

- | | |
|-----|---------|
| 第1節 | つくば市の沿革 |
| 第2節 | つくば市の地形 |
| 第3節 | 人口・世帯数 |
| 第4節 | 産業構造 |
| 第5節 | 土地利用 |
| 第6節 | 都市基盤整備 |
| 第7節 | 景観 |
| 第8節 | 防災 |

第1節 つくば市の沿革

昭和 62 年 11 月 30 日，筑波郡大穂町，同郡豊里町，同郡谷田部町，新治郡桜村が合併，市制を施行し，つくば市が誕生しました。翌年 1 月 31 日には筑波郡筑波町，平成 14 年 11 月 1 日には稲敷郡茎崎町が加わり，現在のつくば市に至っています。

町村合併によるつくば市誕生の背景には，昭和 38 年 9 月 10 日に，国家プロジェクトとして閣議了解された筑波山麓への筑波研究学園都市の建設があります。

筑波研究学園都市の建設は，「東京の過密緩和」，「科学技術の振興と高等教育の充実」を目的に，「均衡のとれた田園都市」として整備することとされました。

昭和 60 年には，「人間・居住・環境と科学技術」をテーマに国際科学技術博覧会（科学万博－つくば’85）が開催されました。これを契機に，研究開発型の企業が進出し，名実ともに「サイエンスシティ・つくば」として世界中に知れ渡ることとなりました。

平成 11 年 6 月には，つくばエクスプレスとその沿線における土地区画整理事業が都市計画決定され，鉄道と一体となったまちづくりが進捗する中で平成 17 年 8 月につくばエクスプレスが開業しました。

また，平成 15 年 3 月には，首都圏中央連絡自動車道の「つくばジャンクション」から「つくば牛久インターチェンジ」の区間が，平成 22 年 4 月には，「つくば中央インターチェンジ」から「つくばジャンクション」の区間が開通しています。

平成 23 年 12 月には，「つくば国際戦略総合特区」に指定され，先進的な研究開発プロジェクトの推進や，世界を視野に入れた新しい産業の創出を目指す取り組みが進められ，平成 25 年 3 月には，環境モデル都市に選定されるとともに，「つくば環境スタイル“SMILE”～みんなの知恵とテクノロジーで笑顔になる街～」を示し，環境に配慮した都市づくりが進められています。

本市の人口は，つくばエクスプレスの開業やその沿線の市街地整備を受けて，平成 17 年には 20 万人を超え，現在では約 22 万人となっています。また，世界的な科学技術開発拠点として多数の研究・教育機関が集積していることから，研究者や留学生など多くの外国人が居住するとともに，国際会議や研修等を目的に世界から様々な人が集い，異なる文化交流が生まれる国際都市となっています。

第2節 つくば市の地形

つくば市は、東西 14.9km 南北 30.4km と南北に長い形状となっており、北端に標高 877m の筑波山を有し、南端に牛久沼を望み、市全体として、筑波山，筑波・稲敷台地，桜川低地で構成されています。市に広がる台地上の標高は 20m～30m で、関東ローム層に覆われたほぼ平坦な地形をしています。

科学技術の中核として計画的に整備された研究学園地区には、教育施設や研究施設が集積しています。また、つくばエクスプレスの沿線では、新しい市街地の整備が進んでいます。一方、それらの周辺部は、南北に流れる小貝川，桜川，谷田川，西谷田川等の河川，周辺市街地とその周囲に散在する伝統的な農村集落，平地林，田畑等が織りなす自然豊かで広がりのある田園風景を呈しています。

＜つくば市の地形＞



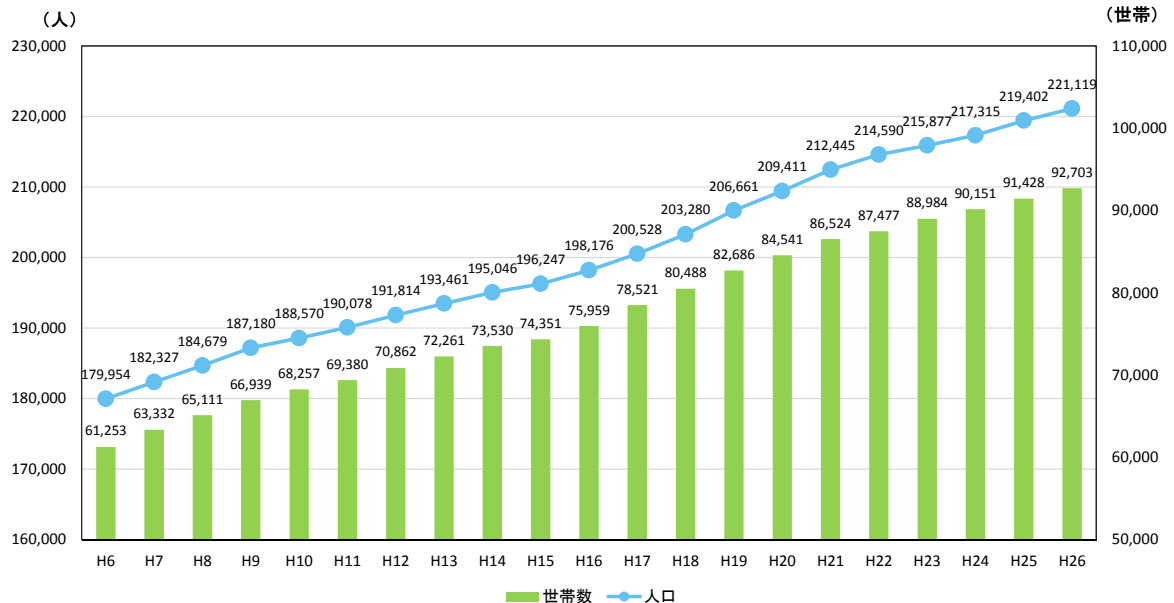
第3節 人口・世帯数

1 市全体の人口・世帯数の推移

つくば市の常住人口は増加傾向にあり、平成 17 年には 20 万人を超え、平成 26 年時点で 221,119 人となっています。

また、世帯数も増加傾向にあり、平成 26 年時点で 92,703 世帯、世帯人員は 2.39 人／世帯となっています。

＜人口・世帯数（常住人口）＞



資料：統計つくば（各年 10 月 1 日現在）

2 年齢構成別人口

平成 22 年の国勢調査による年齢構成別人口を見ると、総人口 214,590 人に対して、年少人口が 32,225 人（15.2%）、生産年齢人口が 145,431 人（68.8%）、高齢者人口が 33,933 人（16.0%）となっています。

平成 2 年からの推移を見ると、少子高齢化が進行していますが、平成 22 年高齢者人口の比率を見ると、県全体よりも低くなっています。

表 年齢構成別人口の推移

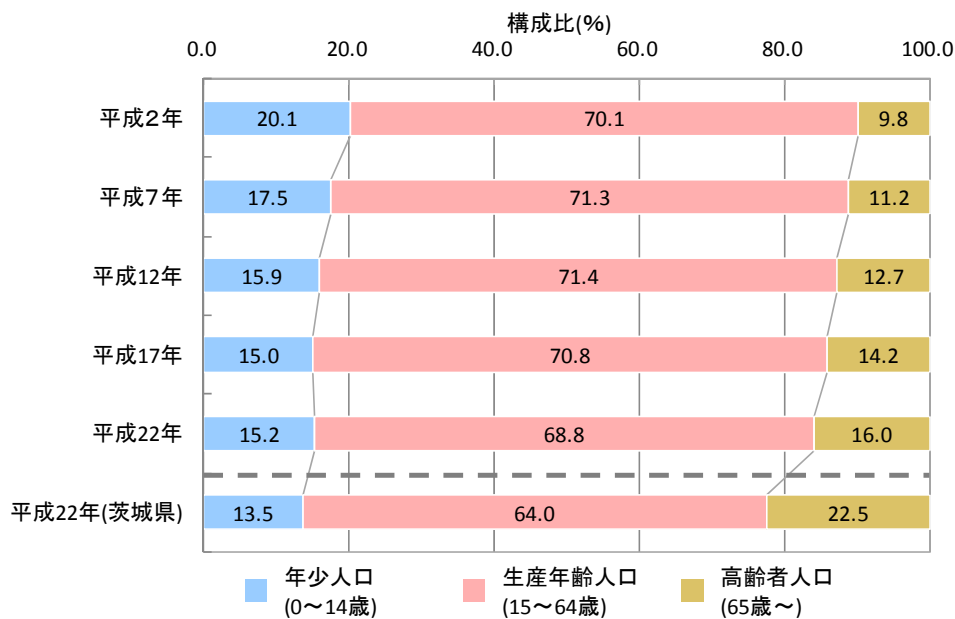
		合計	年少人口 (0～14 歳)	生産年齢人口 (15～64 歳)	高齢者人口 (65 歳～)
平成 2 年	人口	168,466	33,750	117,853	16,395
	比率	100.0	20.1	70.1	9.8
平成 7 年	人口	182,327	31,875	130,076	20,371
	比率	100.0	17.5	71.3	11.2
平成 12 年	人口	191,814	30,500	136,860	24,454
	比率	100.0	15.9	71.4	12.7
平成 17 年	人口	200,528	30,151	141,957	28,419
	比率	100.0	15.0	70.8	14.2
平成 22 年	人口	214,590	32,225	145,431	33,933
	比率	100.0	15.2	68.8	16.0
平成 22 年 (茨城県)	人口	2,969,770	399,638	1,891,701	665,065
	比率	100.0	13.5	64.0	22.5

資料：国勢調査（各年 10 月 1 日現在）

注 1) 合計には年齢「不詳」を含みますが、年齢構成別には含みません。

注 2) 割合は、分母から不詳を除いて算出しています。

<年齢構成別人口の推移>



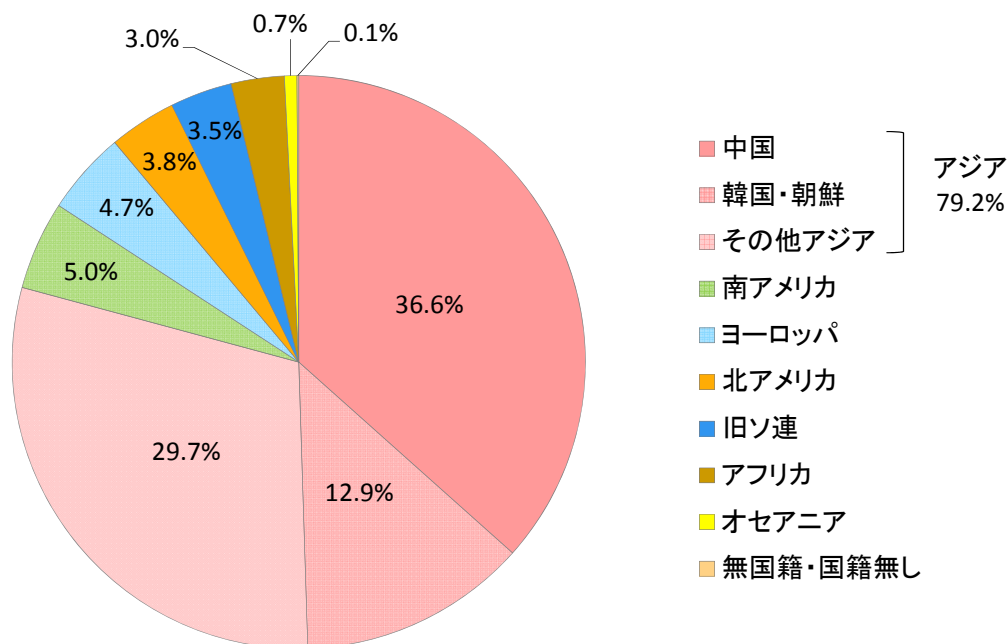
資料：国勢調査（各年 10 月 1 日現在）

3 外国人の住民数

つくば市には、平成 26 年 10 月現在つくば市全体の 3.4%にあたる 7,393 人の外国人が住んでいます。

国籍別に見ると、アジア圏が全体の 79.2%を占めており、そのうち、中国が最も多く全体の 36.6%、次いで韓国・朝鮮が 12.9%となっています。

<外国人の国籍別構成比>



資料：統計つくば（平成 26 年 10 月 1 日現在）

4 人口動態の推移

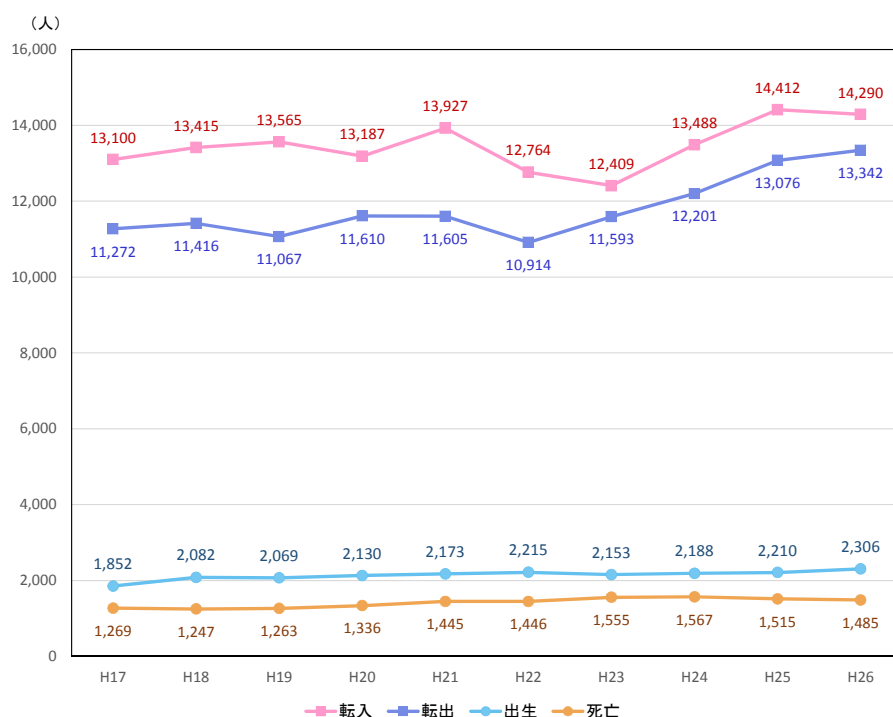
つくば市では、出生者が死亡者を上回っており、自然増の状態が続いています。

人口の社会動態を見ると、転入者が転出者を上回り、社会増の状態が続いています。

転入者について見ると、平成 22 年、平成 23 年に減少しましたが、平成 24 年以降は増加に転じ、14,000 人前後で推移しています。

一方、転出者は、平成 23 年までは概ね横ばいで推移していましたが、その後は増加傾向にあります。

＜人口動態の推移＞



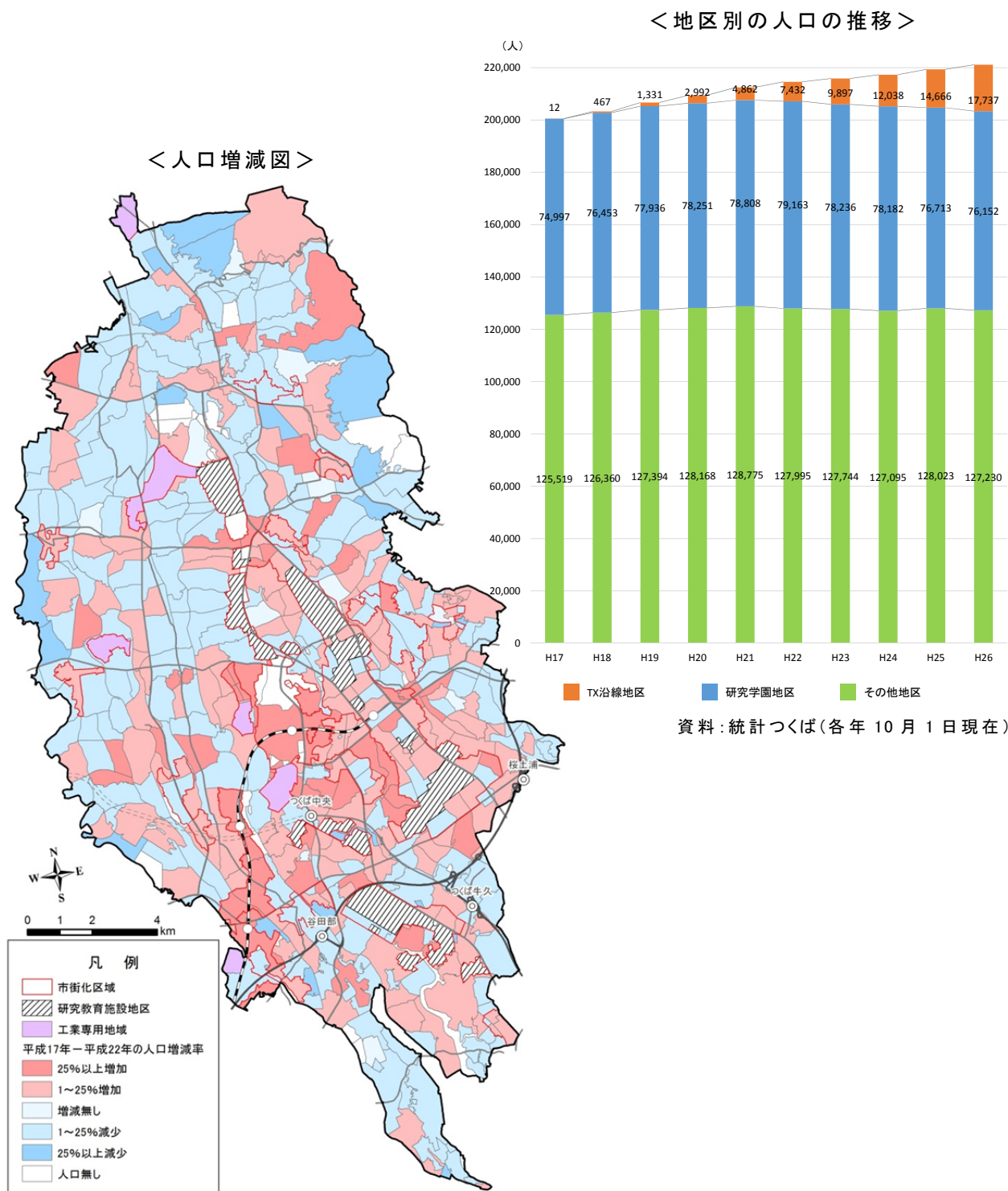
資料：統計つくば(各年 10 月 1 日現在)

注) 住民基本台帳制度一部改正により、平成 24 年以降外国人人口を含む

5 地区別の人口推移

(1) エリア別の人口推移

研究学園地区、つくばエクスプレス沿線地区、その他地区の3地区別に人口の推移を見ると、つくばエクスプレス沿線地区では、つくばエクスプレス開業以降継続して増加がみられます。研究学園地区では平成22年、その他地区では平成21年まで継続して増加していましたが、その後は減少する年も確認できます。



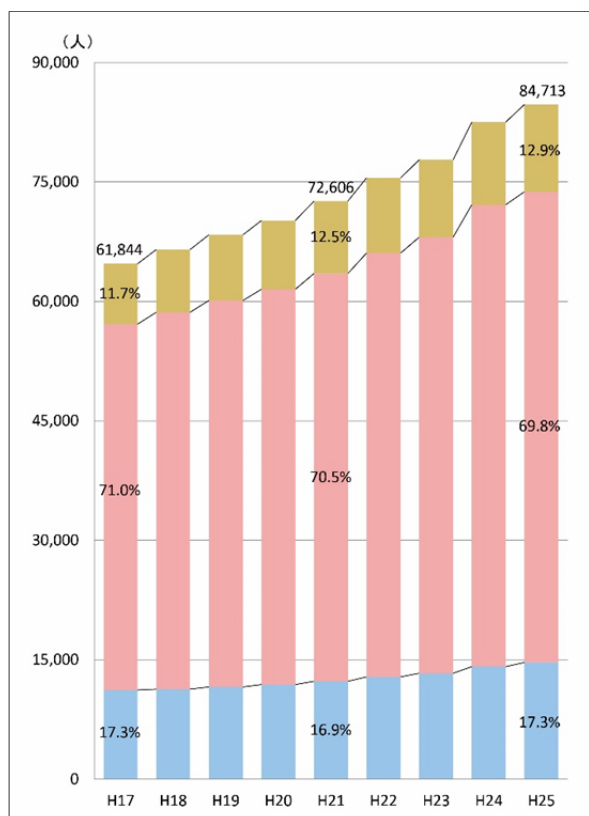
(2) 旧町村別の人口推移

旧町村別に人口推移を見ると、つくばエクスプレス沿線地区を含む谷田部地区や桜地区では増加が続いており、大穂地区、豊里地区でも、緩やかに増加しています。一方、筑波地区、荃崎地区では減少傾向にあるとともに、他地区に比べて高齢化が進んでいます。

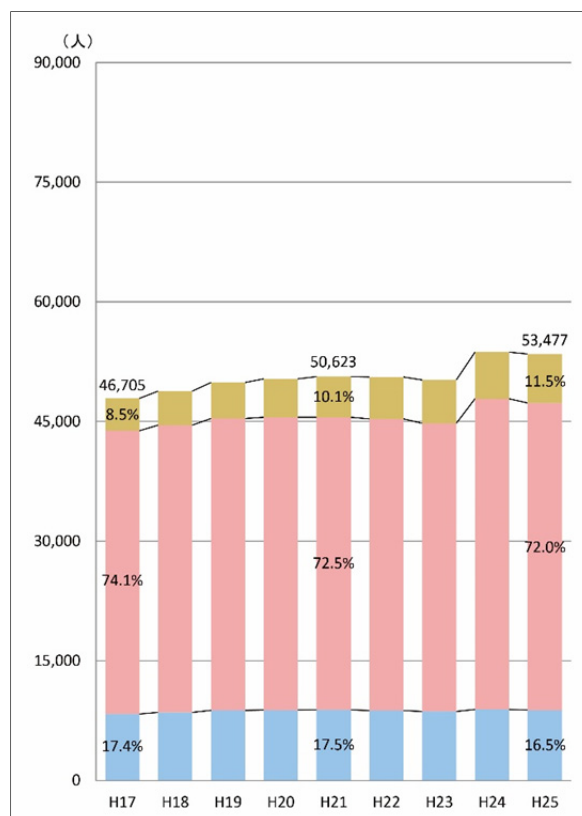
年齢構成の変化を見ると、人口が増加傾向にある地区では、少子高齢化の動きは大きくありません。一方で、人口が減少傾向にある地区では、少子高齢化の動きが大きくなっています。

■ 年少人口（0～14 歳） ■ 生産年齢人口（15～64 歳） ■ 高齢者人口（65 歳～）

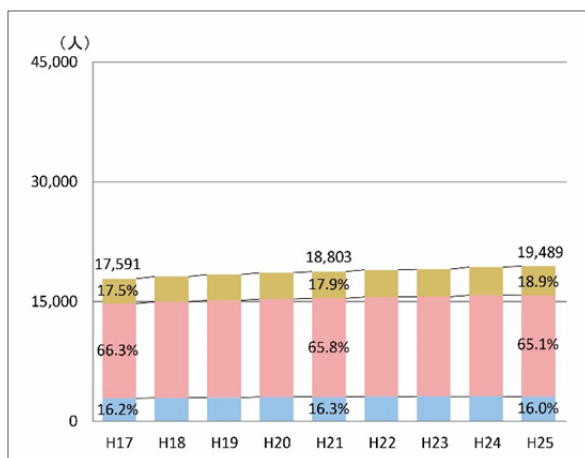
谷田部地区



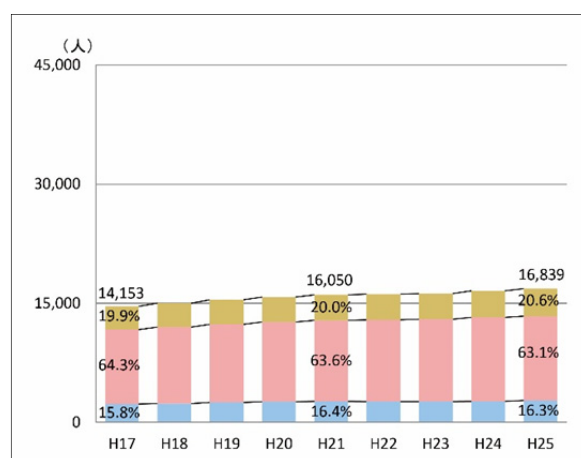
桜地区



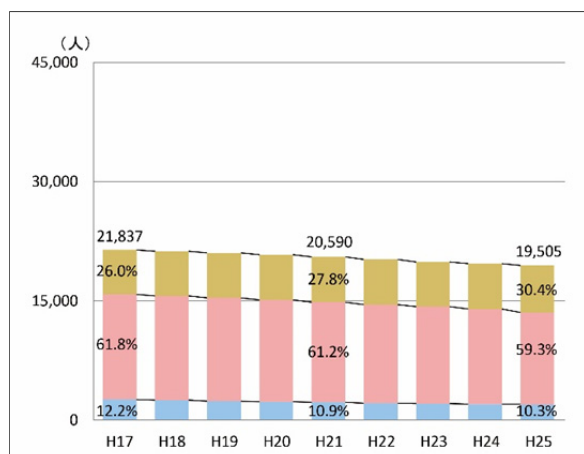
大穂地区



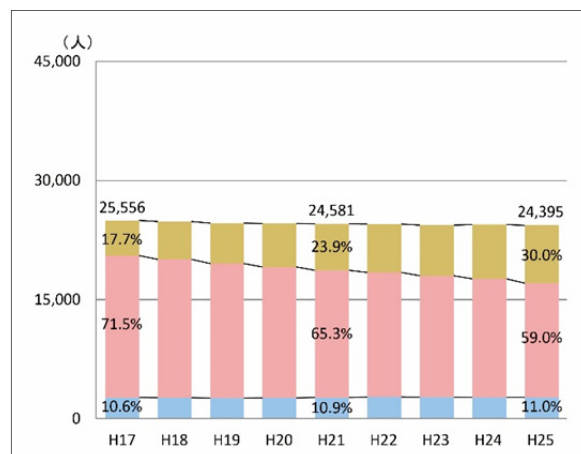
豊里地区



筑波地区



茎崎地区



資料：市民課（各年10月1日現在）